

## 企画展のご案内



## 展覧会名

大正・昭和‘モード’の源泉－国立美術館 コレクション・ダイアローグ－

## 会 場

岐阜県美術館 展示室3(岐阜市宇佐 4-1-22)

## 会 期

令和7年11月15日(土)－令和8年2月15日(日) 午前10時－午後6時  
前期:11月15日(土)－12月25日(木)／後期:1月6日(火)－2月15日(日)

※休館日:毎週月曜日(祝・休日の場合は翌平日)

年末年始 2025年12月26日[金]－2026年1月5日[月]

※夜間開館:令和7年11月21日(金)、12月19日(金)、令和8年1月16日(金)は  
午後8時まで

※展示室の入場は閉館の30分前まで

## 料 金

一般 1,000(900)円 大学生 800(700)円  
高校生以下無料( )内は20名以上の団体料金※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、特定医療費(指定難病)受  
給者証または登録証の交付を受けている方およびその付き添いの方(1名まで)  
無料

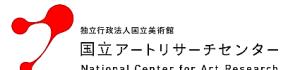
\*マイクロ ID が利用できます

## 主 催

岐阜県美術館、国立工芸館、国立アートリサーチセンター、岐阜新聞社 岐阜放送

## 後 援

NHK 岐阜放送局



本資料に関するお問い合わせ



〒500-8368 岐阜市宇佐4-1-22

TEL 058-271-1313(代表) FAX 058-271-1315

URL: <https://kenbi.pref.gifu.lg.jp>広報担当: 小野由加里  
担当学芸員: 斎藤智愛

E-mail:

[kouhou@kenbi.pref.gifu.lg.jp](mailto:kouhou@kenbi.pref.gifu.lg.jp)

美術館の情報を発信しています

県美術館  
Webサイト

Facebook



Instagram



X

## 本展覧会について

この度、岐阜県美術館では国立アートリサーチセンターによる国立美術館の収蔵品活用事業「コレクション・ダイアローグ」から国立工芸館との協働により「大正・昭和‘モード’の源泉」展を開催します。国立工芸館は1977年の開館以来、工芸・デザイン専門の国立美術館として国内外の工芸・デザイン作品を収集、調査研究し、多種多様な魅力を発信し続けています。

本展では国立工芸館の豊かなコレクションのうち、特に大正・昭和初期に流行したスタイルに焦点をあてています。ジャポニスム、いわゆる日本趣味の影響を受けた19世紀末のアール・ヌーヴォー、20世紀初頭のアール・デコ様式を受けて、日本では自国固有の美意識と結びつき、大正ロマンや昭和モダンガール・モダンボーイといった‘モード’一流行を生み出し、人々の日常に活気を与えました。当時の世相を反映したアクセサリーや家具、金属工芸やガラス工芸、雑誌、ポスターなどは今なお輝きを失っていません。国立工芸館所蔵の工芸・デザイン作品152点を中心に、岐阜県美術館所蔵品から絵画、工芸作品をあわせてご紹介します。

当時の紳士、淑女が愛した工芸からファッショントレンドまで、時代を鮮やかに彩った‘ロマンティック・モダン’をお楽しみください。



杉浦非水《トモエ石鹼》1926年

国立工芸館蔵国立工芸館 前期展示

## 展覧会構成

### 1章 ‘モード’以前

日本の美術工芸品が世界に向けて初めて大規模に紹介されたのは、1862(文久2)年のロンドン万国博覧会(以下、万博)のことで、元駐日英國公使ラザフォード・オールコックが自ら集めた陶磁器類をはじめとする品々を一堂に展示、欧米の人々の関心を集めました。

1867(慶應3)年のパリ万博には江戸幕府と薩摩・佐賀藩が多くの工芸品類を出陳、1873(明治6)年のウィーン万博で明治政府は日本国として初めて参加をすることとなり、好評価を得ることができました。こういった経緯を踏まえ、日本政府は殖産興業政策の一環として海外への販路拡大を意識した美術工芸品を製作し、輸出していくこととなります。

ヨーロッパでは以前から東洋の中でもとりわけ日本的な装飾性をもつ絵画や工芸、または家具や服飾品が制作されるなど「ジャポニスム」—いわゆる日本趣味が巻き起こり人々を熱狂させていました。その一方でウィーン万博から20年後の1893年、シカゴのコロンブス世界博覧会をはじめ、1900年のパリ万博では変化の兆しを見せない旧態然とした日本工芸は批判を受けることとなります。ヨーロッパではすでにジャポニスムを咀嚼し、植物などの有機的曲線をもとに生み出された優美なアール・ヌーヴォー様式が最新の流行として一世を風靡していました。



アルフォンス・ミュシャ

《サラ・ヘ ルナール アメリカン・ツアー》

1895年 国立工芸館 後期展示

## 2章 ‘モード’ の始まり

1900(明治 33)年のパリ万覧には画家の黒田清輝や浅井忠などをはじめとする多くの日本人作家たちが観察に訪れています。黒田は帰国に際し、当時のフランスで流行していた書籍やポスターを持ち帰りました。黒田の門弟であり日本画家を目指していた杉浦非水はそれらを目にしたことにより図案家へ転身、1908年から三越の図案部に入店します。嘱託という立場を貫いた非水は他の企業デザイン、書籍などの装丁も手掛け、日本における商業デザインの領域を切り拓いていくことになります。浅井は 1902年、フランス留学から帰国後、絵画制作に加え、意匠研究団体である遊陶園、京漆園を通して陶磁器や漆器などの図案を提供するようになります。浅井が工芸への関わりを積極的に見せたように、分野の枠組みを越えて、生活の身近なものの制作に画家や図案家たちが高い関心を向けるようになるのもこの時代の重要な特色といえるでしょう。

商業面では 1904年、三越呉服店が「デパートメントストア」宣言を行い、日本初の百貨店が誕生します。「呉服屋」という個人オーダー制度から、客自らが多数の商品から選ぶ販売方式への移行とともに、消費を促すための「流行」をつくり上げ、大衆を対象とした商業形態へと舵を切っていくことになります。



杉浦非水《三越呉服店》

1915年 国立工芸館蔵



板谷波山《葆光彩磁牡丹文様花瓶》

1922年 国立工芸館蔵 撮影:エス・アント・ティ フォト

## 3章 ‘モード’ の揺籃期

今から 100 年前の 1925(大正 14)年、フランス・パリでは現代装飾美術・産業美術国際博覧会(アール・デコ博)が開催されました。ピエール・シャローは新たな工業素材、ジャン・デュナンは東洋の工芸素材である漆を用い室内装飾を発表。A.M.カッサンドルはキュビズムの要素をグラフィックに転用した幾何学的なデザインのポスターを出品しました。

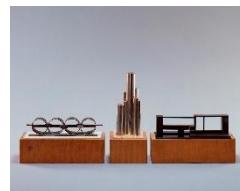
水平垂直の直線を主体とする幾何学的な文様形態を持つアール・デコ様式の出現とともに、ドイツでは建築家ヴァルター・グロピウスらがかかわったドイツ工作連盟や芸術学校バウハウスが隆盛を誇り、各方面へと影響を及ぼした時代もあります。アール・デコ博には日本からも金工家の津田信夫<sup>（ふただ のぶお）</sup>が審査員として参加。津田は帰国後、諸国で隆興した新たな‘モード’について説き、その影響を受けた高村豊周<sup>（たかむら とよしゅう）</sup>らは、工芸界における伝統革新を目指して 1926(大正 15・昭和元)年「无型」<sup>（むけい）</sup>を結成、工芸従来の「実用」や「産業工芸」といった思想から「美術」としての工芸の確立を目指し活動を行っていきます。

1927(昭和 2)年には帝国美術院展覧会(帝展)における第四部工芸部門の開設のほか、国画創作協会(現・国画会)に富本憲吉を迎えて工芸部を新設。杉浦非水は日本初の図案研究団体「七人社」を結成。柳宗悦らもまた「日本民藝美術館設立趣意書」を発表し、「民藝」運動を活発化させていきます。従来の殖産興業政策の一環であった「美術工芸品」から、表現としての「美術工芸」へと躍進すべく、新たな‘モード’が生み出されていくことになります。



作者不詳《イヤリングとイヤリング掛け》

1920-30年代 国立工芸館蔵 撮影:野村知也



杉田禾堂《用途を指示せぬ美の創案》

1930年 国立工芸館蔵 撮影:藤川清

## 4章 ‘モード’ の分化と拡散

大正から昭和へと時代が移る中で工芸家たちによる団体の設立などが相次ぎ、図案(デザイン)という意識が浸透していくと、工芸を富裕層のもののみとせず「美を生活の中に」といった思想から大衆化、産業化しようとする運動が各地ではじまります。

富本憲吉は自身の表現を追い求めながらも「安い陶器」と称する量産品製作を志し、「民衆のための美」の在り方を模索し続けます。山本鼎らは「農民美術」として農民の生活と芸術を結び付けようとする運動を興し、その活動は全国へと広がっていきます。藤井達吉は「手芸」という無垢な存在に美術の可能性を託し、生活基盤を支える主婦に向け「手芸」を通して「美しい生活」を作り出そうとしました。さらには1928年(昭和3)、工芸品、工業製品を含む日本の産業工芸の確立と輸出振興を目的に宮城県仙台市に「商工省工芸指導所」が設置されることになります。

服飾文化面においても洋装、西洋式の化粧法などが徐々に広がりをみせ、モダンガール・モダンボーイと呼ばれる先端のファッショニに身を包んだ人々が現れ、日本画家たちもまた新たな時代の訪れ、文化の変化を鋭敏に捉え新たなミューズたちを描き出していきました。

世界恐慌や震災、そして2度の世界大戦が起きた激動の時代——それが大正・昭和でした。人と共にある工芸やデザイン、そして‘モード’は時の荒波に翻弄されながらも歩みを進めていくことになるのです。



作者不詳《口紅、シガレットケース、コンパクトのセット》

1920-30年代 国立工芸館蔵 撮影:野村知也



長繩士郎《店舗》

1952年 岐阜県美術館蔵

## 関連プログラム

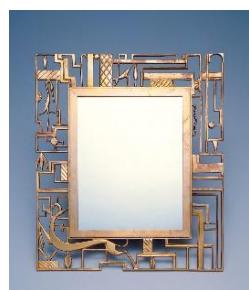
### ■記念講演会「国立工芸館の工芸とは」

日 時:2025年11月29日(土)13:30-15:00

会 場:岐阜県美術館 講堂

講 師:唐澤昌宏(国立工芸館 館長)

備 考:定員170人 事前申込み不要 参加費無料



ハーゲンアウア《装飾額付鏡》

1925年頃 国立工芸館蔵 撮影:アローアートワークス

### ■美術講座「大正・昭和の口マンティック・モダンーファッションと文化」

日 時:2026年1月17日(土) 13:30-15:00

会 場:岐阜県美術館 講堂

講 師:齋藤智愛(岐阜県美術館 学芸員)

備 考:定員170人 事前申込み不要 参加費無料

### ■美術講座「大正口マンとモダン:金工の不思議な魅力を探る」

日 時:2026年2月7日(土) 13:30-15:00

会 場:岐阜県美術館 講堂

担 当:正村美里(岐阜県美術館 副館長兼学芸部長)

備 考:定員170名 事前申し込み不要 参加費無料

## 関連プログラム

### ■コレクション・ダイアローグ×クロストーク&ワークショップ

日 時:2026年2月15日(日) 13:30-15:30(予定)

クロストーク 13:30-14:30/ワークショップ 14:30-15:30

会 場:岐阜県美術館 多目的ホール、館内

担 当:岐阜県美術館教育普及係

トーク登壇者:可児光生(美濃加茂市民ミュージアム 館長)

大谷省吾(国立アートリサーチセンター作品活用促進グループリーダー、

東京国立近代美術館 副館長)

日比野克彦(アーティスト、岐阜県美術館 館長、東京藝術大学 学長)

### ■夜間開館ギャラリートーク

日 時:2025年11月21日(金)、2026年1月16日(金) 18:00-18:45

会 場:岐阜県美術館 展示室3

担 当:齋藤智愛(岐阜県美術館 学芸員)

備 考:事前申込み不要 要観覧券



ルネ・ピュトー《幾何学文花瓶》

1935-40年頃 国立工芸館蔵 撮影:エス・アンド・ティ・フォト

### ■大正・昭和‘モードの源泉’ ×ナンヤローネ アートツアー

日 時:2025年11月30日(日) 14:00-15:30

会 場:岐阜県美術館 多目的ホール、展示室3

備 考:要事前申込み 要観覧券

### ■大正・昭和‘モードの源泉’ ×ナンヤローネ アートアクション

日 時:2026年2月1日(日) 10:30-12:00、13:30-15:00

会 場:岐阜県美術館 多目的ホール

備 考:要事前申込み 参加費無料

### ■パイプオルガン定期演奏会

日 時:2025年12月14日(日)、2026年1月11日(日)各日 14:00-(40分程度)

会 場:岐阜県美術館 多目的ホール

### ◆「生誕120周年 坪内節太郎／没後130周年 牧野伊三郎」

2025年11月5日(水) - 2026年3月29日(日)

### ◆「ルドンと音楽」

2025年11月5日(水) - 2026年3月29日(日)

### ◆「見慣れない風景」

2025年11月5日(水) - 2026年3月29日(日)

### ◆「グラフィックデザインの曙—加藤孝司とシルクスクリーン」

2025年11月26日(水) - 2026年3月15日(日)

### ◆AiM Vol.18 向井 大祐

2025年10月30日(木) - 2025年12月14日(日)

### ◆ぎふの日本画 冬来たりなば 春遠からじ 一岐阜県ゆかりの画家が描いた花鳥—

2025年12月2日(火) - 2026年3月29日(火)

岐阜県美術館 企画展

## 大正・昭和‘モード’の源泉

— 国立美術館 コレクション・ダイアローグ —

## 広報画像貸出申込書

FAX 送信番号: 058-271-1315



貴社名		ご担当者名	
媒体名	(掲載コーナー、特集名: )		
ご住所	〒		
ご連絡先	TEL:	FAX:	
	E-mail:		

## 1. ご紹介いただける場合、貴媒体の情報をお知らせください。

掲載／放送	月	日	発売・放送(月号)／発行部数	部
掲載内容				

## 2. 広報画像はご使用になりますか。

はい 画像データ到着希望日(月 日)  いいえ(写真は使用せず、文字掲載のみ)

## 3. 別紙の写真をご参照の上、ご希望の【画像番号】にチェック☑してください。

下記キャプションの作品名称、所蔵を必ずご記載ください。

<input checked="" type="checkbox"/>	番号	ご掲載時のキャプション表記
<input type="checkbox"/>	①	ルネ・ビュトー《幾何学文花瓶》1935-40年頃 国立工芸館蔵 撮影:エス・アンド・ティ フォト
<input type="checkbox"/>	②	杉浦非水《トモエ石鹼》1926年 国立工芸館蔵
<input type="checkbox"/>	③	長繩士郎《店粧》1952年 岐阜県美術館蔵
<input type="checkbox"/>	④	作者不詳《イヤリングとイヤリング掛け》1920-30年代 国立工芸館蔵 撮影:野村知也
<input type="checkbox"/>	⑤	各務鑑三《飾皿 銘祈り》1929年 岐阜県美術館蔵
<input type="checkbox"/>	⑥	ルネ・ビュトー《花模様大皿》1920-25年頃 国立工芸館蔵
<input type="checkbox"/>	⑦	内藤春治《壁面への時計》1927年 国立工芸館蔵 撮影:藤川清
<input type="checkbox"/>	⑧	ルネ・ラリック《ブローチ 桑の木と甲虫》1900年頃 国立工芸館蔵 撮影:アロー アート ワークス
<input type="checkbox"/>	⑨	杉田禾堂《用途を指示せぬ美の創案》1930年 国立工芸館蔵 撮影:藤川清
<input type="checkbox"/>	⑩	竹久夢二《少年》1930-34年頃 国立工芸館蔵 撮影:斎城卓

## ■広報画像一覧

①



ルネ・ビュート《幾何学文花瓶》

1935-40年頃 国立工芸館蔵 撮影:エス・アンド・ティ フォト

②



杉浦非水《トモエ石鹼》

1926年 国立工芸館蔵

③



長繩士郎《店紹》

1952年 岐阜県美術館蔵

④



作者不詳《イヤリングとイヤリング掛け》

1920-30年代 国立工芸館蔵 撮影:野村知也

⑤



各務鑄三《飾皿 銘取り》

1929年 岐阜県美術館蔵

⑥



ルネ・ビュート《花模様大皿》

1920-25年頃 国立工芸館蔵

⑦



内藤春治《壁面への時計》

1927年 国立工芸館蔵 撮影:藤川清

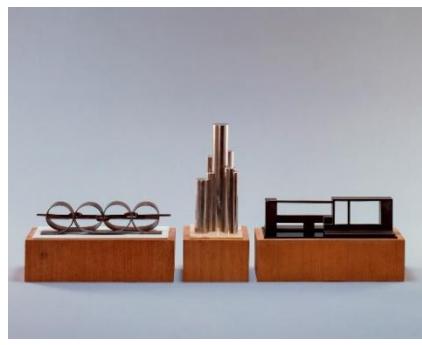
⑧



ルネ・ラリック《ブローチ 桑の木と甲虫》

1900年頃 国立工芸館蔵 撮影:アロー アート ワークス

⑨



杉田禾堂《用途を指示せぬ美の創案》

1930年 国立工芸館蔵 撮影:藤川清

⑩



竹久夢二《少年》

1930-34年頃 国立工芸館蔵 撮影:斎城卓

## 【広報画像使用に関する注意事項】

- 本展広報目的での使用に限ります。
- 展覧会名、会期、会場名は、必ず掲載してください。
- 作品画像は全図で使用してください。トリミングや文字を重ねるなどの画像の加工・改変はできません。
- 転載などの2次使用をされる場合には、別途申請いただきますようお願いいたします。
- Webサイトに掲載する場合は必ずコピーガードをしてください。
- 掲載・放送後は必ず、掲載誌・同録テープ・DVD等を、岐阜県美術館へ1部お送り願います。
- 会期中の会場取材・撮影をご希望の場合は岐阜県美術館までご連絡ください。

お問い合わせ 岐阜県美術館 広報担当 小野由加里 ☎ 500-8368 岐阜県宇佐 4-1-22 TEL 058-271-1313 FAX 058-271-1315